第34回国語分科会漢字小委員会・議事録

平成21年 7月17日(金)
午後2時～午後5時
文部科学省・3F1特別会議室

〔出席者〕

(委員) 前田主査, 林副主査, 阿辻, 井田, 内田, 金武, 笹原, 杉戸, 高木, 武元,
出久根, 東倉, 納屋, 濱田, 松村, 邑上, やすみ各委員(計17名)
(文部科学省・文化庁) 清木文化部長, 匂坂国語課長, 氏原主任国語調査官ほか関係官

〔配布資料〕

- 1 第33回国語分科会漢字小委員会・議事録(案)
- 2 意見募集で寄せられた意見(追加及び削除希望の字種一覧)
- 3 「新常用漢字表(仮称)」の音訓に関する意見<字種別>
- 4 学校教育における漢字指導と常用漢字について(高木委員提出)

〔参考配布〕

- 読売新聞記事(平成21年7月17日, 朝刊34面)

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認があった。
- 2 前回の議事録(案)が確認された。
- 3 事務局から配布資料2及び3の説明があり, 質疑応答の後, 配布資料2及び3に基づいて, 字種及び音訓の見直しについて意見交換を行った。
- 4 高木委員から配布資料4の説明があり, 質疑応答の後, 配布資料4に基づいて, 国語教育と「新常用漢字表(仮称)に関する試案」との関連について意見交換を行った。
- 5 次回の漢字小委員会は, 7月28日(火)午前10時から12時まで, 文部科学省・3F1特別会議室で開催することが確認された。
- 6 質疑応答及び意見交換における各委員の意見は次のとおりである。

○前田主査

ナンバーの付いていない参考配布の資料ですけれども, これとは別のことで国語分科会の方に書簡が来ておりますので, 併せて林副主査から御説明をお願いしたいと思います。

○林副主査

国語分科会長ということで私のところに1件意見書が来ておりますので, これについて御紹介申し上げまして, 併せてただ今の新聞記事について御説明いたします。

意見書は, 意見募集の期間外でありますけれども, 日本歯科医師会と日本歯科学会から文化審議会国語分科会の会長である, 私あてに参りました。内容は, 「顎(ガク・あご)」という字, この字は追加191字に含まれている字であります, これを191字から削らないでほしいというものです。5件ほどその理由が付いた形で, 正式にこういう意見を寄せてきております。かつてこういう意見を御紹介した前例もございますので, 正式な意見書ということで, この場で御紹介だけと思っております。理由としては, 例えば, 医療の現場だけではなくて, 非常に重要な身体の部位を表す語である, また, 生命を保つのに必要な重要な身体の部位を表す語の漢字である, それから医療の現場だけではなくて, 日常的に例えば口腔ケアの現場などでもよく使う字であって, これは是非このまま追加字種の中に残してほしいという, そういう希望でございます。

次に、資料ナンバーの付いていない読売新聞の記事について簡単に御説明いたします。

この記事につきましては、今日の朝刊ですので、御覧になった委員の方とまだの委員の方がいらっしゃるだろうと思います。今初めて御覧になったという委員もいらっしゃると思いますが、こういう記事が出ておりました。教育現場からの指摘を受けてそこに書かれていますような「淫（イン）」、「呪（ジュ）」、「艶（エン）」、「賭（ト）」という4字など、一部の漢字について、この漢字小委員会で再検討することを決めた、これは異例の再検討である、そういう趣旨のように私はこの記事を理解しております。しかし、本日の審議の予定はこういうことではございません。今期の初めに審議予定をお諮りして御了承を得ておりますように、今日は意見募集を受けて字種・音訓についての見直しについて意見交換をするということでございます。これらの教育現場から指摘のある字の審議が本日の審議の目的ではございませんし、「異例の再検討」ということでもございません。ましてや再検討することをこの漢字小委員会が決めたというのも事実ではございませんので、この点については私の責任において、ただ今のように御説明させていただきたいと思っております。

I 配布資料2及び配布資料3についての協議

○前田主査

ただ今のことについては御報告という形になりますけれども、よろしいでしょうか。

次に、配布資料2及び3についての説明につきまして、何か疑問の点などありましたら質問をしていただければと思います。（→挙手なし。）

特にございませんので協議の方に入りたいと思っております。配布資料2についてです。これは追加希望字種について、それから削除希望字種についてと区別があり、削除希望字種については、追加候補191字からものと、現行の常用漢字からのものがありますが、まず、追加希望字種について御意見を頂ければと思います。

○阿辻委員

ここ数回の会議で、2番目に追加希望の多い「碍（ガイ）」、石偏の「碍」、これが何度か議論になっておりますので、もうこの辺で決着を付けるべきかなと個人的には思います。まず、これを取り上げて議論されたらどうかなという提案です。

○前田主査

それでは、今の「碍」という字につきまして、どなたか御意見を頂ければと思います。前にも意見はございましたけれども、もう一度よろしければおっしゃってください。

○阿辻委員

申し訳ありませんが、この「碍」という字に関するこれまでの意見の流れをかいつまんて賛否両輪あったと思うのですが、今、覚えていらっしゃる範囲で結構ですので、簡単に御紹介いただけませんかでしょうか。

○氏原主任国語調査官

確認ですけれども、この漢字小委員会では出されている意見で、ということでしょうか。

○阿辻委員

そうです。

○氏原主任国語調査官

漢字小委員会の中では、まだ明確に賛成とか反対という御意見は出ていないと思っております。

恐らく最初の意見としては、これについて議論をした方がいいんじゃないかという御意見が林副主査からあったのと、それから出久根委員からも、この問題は非常に大事な問題だから議論しなければいけないんじゃないかという御意見があったと思います。また、なかなか難しい問題であるという御指摘もありましたが、これまでの漢字小委員会の中では、明確にこういう観点から賛成するとか、あるいは反対するとかといった御意見はなかったと思います。

○林副主査

今日ここで、特段、御意見がなければ前回幾つか意見を伺っておりますし、それからしばらく前に読売新聞の記事で、この「碍（ガイ）」の字の受け止め方についていろんな周辺のことを含めて解説しておられました。やはり委員の間でも、御認識は高くなってきているだろうと思いますけれども、この審議は、最初に御了解いただいておりますように、一つ一つについて決めていくというよりは、できるだけ委員の意見をたくさんお聞きして、その中から方向性をつかんで最終案としてまとめて最終的にはそこで御審議を頂くということで、進め方は御了解いただいておりますので、ここで特に御意見がなければ、これまでの御意見や、それからそういう周辺の状況を踏まえて最終案までにまた詰めたいと思います。

○金武委員

確認なんですけれども、前回、この資料を頂きまして非常に要望の多かったものについては、もし採用しないとすれば、何らかの理由をはっきりさせた方がいいのではないかということをお願いしました。そこで、この「鷹（たか）」と「碍」については非常に多いということで、採用しない場合はそれなりの理由を繰り返しになっても、はっきりこの漢字小委員会で確認しておいた方がいいんじゃないかと、そういうふうに思っています。で、今、「碍」が出ましたが、私はあえて入れなくてもいいと思います。それは、今、御紹介のありました読売新聞の7月2日付けの記事に出ておりましたけれども、要するに、障害者団体で「碍」の使用について否定をしているところがあるわけでありまして。この「碍」の字も、やはり「さまたげ」という意味があって、マイナスであるということで、例えば、障害者インターナショナル日本会議の事務局長は、「「障害」とは、社会にあるバリアや差別のことを指す、と考えている。漢字を変えて社会の現実を覆い隠してしまうことを危ぶむ。」とっておりますし、日本発達障害ネットワークの副代表は、「「障害者という言葉に抵抗はある。ただ、変えるなら、新しい言葉を考えるべきだ。」と、あるいは日本障害者協議会の常務理事も「「しょうがい」という言葉について、国語学者も交えて新しい言葉を考えてほしい。」とっており、石偏の「碍」にしてくれという意見が圧倒的多数ではないというふうにも思われます。

また、朝日新聞の今年の1月23日の朝刊「私の視点」にも、東海聴覚障害者連盟相談役の方が、自治体で「障害」の「害」を平仮名にしていることについて反対意見を述べているわけですが、平仮名にしたからといって、社会環境や政策的不備で起きている不自由さという社会的被害という現実がなくなるわけではないし、また石偏の「碍」に言い換えたところで、「さまたげる」という意味で適切とは言いがたい。「害」を平仮名もしくは漢字の「碍」に変えたところで現実の社会的被害が何一つ変わるわけではない。それどころかその被害をあいまいにして、挙げ句の果てに「害がなくなった」という風潮を広める危惧を覚える。そんなことより、「害」を取り除く具体的な施策の方がずっと大事だということを目指しています。文字だけ変えても現実是不変であるという意見が多いようですので、常用漢字に入れて法律まで変えて使わなければならないという問題ではないんじゃないかと思うんです。

それともう一つ、この石偏の「碍」は決して易しい漢字ではなくて、日本碍子という会社がありますが、この会社は漢字表記の固有名詞であるにもかかわらず、宣伝や、広告に

おいては片仮名の「ガイシ」を使っている。「碍」は非常に難しいという意識で、片仮名を使っているのだと思います。このような理由で「碍」は新常用漢字に採用しなくてもいいのではないかと思います。

○前田主査

「碍」の問題は以前にも御意見を頂いていますが、今の御意見は「碍」は入れなくてもいいという御意見かと思えます。

○出久根委員

私が知りたいのは、現在使われている「害」という字で、だれが不快になっているのかということなんです。結局、団体が反対しているのか、個人がそれを不快としているのか、この辺がはっきりとまだよく分からないような気がするんです。障害者の御本人が非常に不快であるという意見、この寄せられた意見には一人もなかったと思うのですが、ほとんどは何か団体なんです。この辺がよく分からないので、何とも言えないのですが、どうなんでしょうか、現在の表記で不快だという個人の方というのはどのくらいいるのでしょうか。これは、調査というのにはできないですね。

○氏原主任国語調査官

そうですね。調査は難しいと思います。

○出久根委員

何か今、早急に決められるような問題でもないというふうに、私も最近は考えるようになりまして、もうちょっと経過を見てと言いますか、しばらく様子を見てから決めた方がよろしいのではないかと思います、現在の私の意見です。

○前田主査

これについては、もう少し慎重に様子を見たいということがございますね。

○杉戸委員

意見を求められたときに戸惑っているのはよりどころが…。どうお答えすべきか、どう判断するか、よりどころがないという思いがこの字については特にあります。先ほど金武委員が「障害」というその単語について、いろいろな意見が意味的にもあるいは同音類字というような関係に立つという、そういうところも関係することとして指摘されました。その議論は「碍（ガイ）」の字だけでなく「障害」という単語の話としてすべて話が進んでいます。それから日本碍子という固有名詞も例として出されました。これもやはり固有名詞に含まれる名詞「碍子」の問題として問題になっていると思えます。

それから、かつてこの場でほかに例はないかということで「融通無碍」という言葉が例として出されました。そのことを思い出しながら、今の議論を聞いていたのですが、よりどころ、つまり追加という希望をどう扱うかということについて、判断するときのよりどころについて、その字一つ一つで単漢字として考えていくのは非常に難しい、単語として考えなければいけない、そしてその単語についての情報が欲しいと思えます。そのためには、何らかの調査が必要だという意見があり、準備中であるということが議事録にもありました。その調査は、書けるか／書けないか、読めるか／読めないかという漢字一つ一つの話として何か議論が進んでいるように思えます。これは文字表記のことを考える上ではちょっと順序が逆転しているのではないかと思います。ある単語を使うか使わないかというところから質問を始めて、そしてその単語を書くときにこの漢字を使うか使わないかという、そういう順番で質問なり議論を進めるべきだと思います。例えば、今の「碍」という字を議論するためのよりどころを調査に求めるとして、その「碍」という文字を読め

るか／読めないか、書けるか／書けないかというふうに問うのではなく、「障害」とか「碍子」とか「融通無碍」とかそういう単語のレベルで調査をする。例えば、この単語を新聞やテレビで使うのがいいと思いますか、使いますかと聞いて、いや、この単語は使わない方がいい、あるいは使った方がいい、というその分岐をまずして、使った方がいいというときに、じゃあ、この漢字を使うかどうかという二段構え、三段構えのそういうデータが欲しいということを思います。

後ほど、別のときに何か機会があれば、このことを申し上げようと思っていたのですが、今「碍」の字が出て、やはりこの文字についても、同じ枠組みで考えるべきことがあるなと思ったので、ちょっと長々しく申しましたが、よりどころをそういう形で持たないと、ほかの何らかの判断基準が持てる文字は幾つかあると思うのですけれども、判断のよりどころがそういう形でないとはっきりしない文字が、今、俎上に載っていると思います。

○武元委員

この漢字をもし常用漢字に入れたとしますと、用例において「障害」という言葉をこの「碍」を使って書くかどうかということがポイントになってしまうわけですね、そうじゃないと意味がないということだと思のです。それに関して、先ほど金武委員が御紹介くださったわけですし、それから以前に氏原主任国語調査官からもお話があったと思うのですけれども、こぞって「障害」の「ガイ」をこの「碍」で書くべきだというふうになっているわけではないということであるならば、この字を取り上げることはちょっとおかしいというふうに私は思います。

○前田主査

いろいろ意見が出まして、この字一つでも、この字一つだけで考えてはいけないというふうなことがあります、判断が難しいところだということをございます。そこまでのところを伺って、これについては、それ以上なければ一応ここで終わりにしたいと思います。金武委員の出された後半の問題、杉戸委員のおっしゃったこととも重なってきますけれども、この加える／外すという判断の問題ですね、これは私どもは今まで一定の基準でもってやってきて、そして今の結果のところまで来たというわけなのですが、それについて新たに一般からの意見を求めまして、考える機会になったということです。その外す／外さないという理由、これはなかなか難しいところだと思います。

外す／外さないということを問題にするならば、これは別に意見が多いから何とかということには必ずしもならない。ある運動があってその運動をした結果、非常に多くの意見が寄せられるというようなこともあるわけですから、そういったところもやはり考えなければいけない。また調査自体についても先ほど杉戸委員のおっしゃったような、どういう手順で、どういう順番で、何を目的としてやるかというふうなことが問題になってくる。判断をしていく場合、今までの形で表にしたものであっても、それはそれなりの判断の手順というものがあるわけです。ある意味では、一字一字について違ってきているわけで、その字の用例を考えながら私どもは重みを付けて、この場合にどういうふうなところを第一に考えるべきかということを考えながら、バランスを考えてやっている。また、調査についてもいろいろ意見があるわけですが、この調査というものは量が多ければいいとも言えないし、いろいろな制約もあって実際上できるか、できないかということもあります。現在の段階で私どもが最もいいという資料を使ってやってきているわけです。

ですから、その辺のところは前の「表外漢字字体表」あるいは常用漢字表などの場合を考えてみると格段に進んではいるけれども、それなりにやっぱり限界のあることも確か、少しでもいいものを資料として使いながら判断の基準を出していくということが必要です。そういう点で言うと、個別に一つ一つの理由を書くというようなことが可能なかどうか、この辺のところはやはりちょっと慎重にならざるを得ないのではないかと思います。

○林副主査

今、前田主査がおっしゃいましたのは、先ほど金武委員が指摘されました特に追加希望の多い字種については採否について、それなりにこの漢字小委員会としても説明するような方向が必要ではないかという御意見で、これは私もそのとおりだというふうに思いますが、それをどういう形で説明をするのか、あるいはどういう説明にするかというのはこれからのことで、一応私は金武委員の方向性というのは、私自身も全くそう思う点でもありますので、この点は、またこれから考えた上で最終的な案と一緒にお示しして、御審議を頂くということだろうと思います。今日は、そういう形で御了承を頂ければ、次の問題に進めるのですが…。

○武元委員

以前、三鷹の「鷹（たか）」については認めてもいいんじゃないかというような御意見があったように記憶しているのですけれども、この件については結論が出ているのですか。

○林副主査

その点についても、今日はざっくりばらんに御意見を伺うところでございますので、武元委員、重ねて御意見があれば、この際おっしゃっていただくのがよろしいかと思えます。

○武元委員

私は、三鷹に何の恨みもないのでございますけれども、一般的な造語力ということからすれば、この字は、ほかのいわゆる常用漢字のレベルとして考えるものからは、ちょっとずれているのではないかと個人的には思います。

○金武委員

私の意見ですが、この多い意見を見ますと、ほとんどが自治体関係ですね。個人の意見はあるのかどうか、あっても極めて少ないと思います。自治体の場合、固有名詞として、「鷹」は当然使えるわけで、常用漢字に入れなくても何の不自由もないと思いますから、今おっしゃったように造語力も余りないし、別に片仮名で書いても、鳥の場合は問題ないと思いますので、特に入れなければならない必然性はないと思います。

○阿辻委員

蛇足ですが、三鷹の「鷹」を入れると、札幌の「幌（ほろ）」とか函館の「函（はこ）」とか、この『漢字出現頻度数調査』では出現頻度数が大変少ない文字も同様のと言うのでしょうか、我も我もとなだれを打って起こってくるという可能性があるのです、今、お二人がおっしゃった線引きというのは大変大切なことではないかと思えます。

○濱田委員

都道府県名については入れようという議論で来たと思います。三鷹の「鷹」については町を挙げて入れてくれという運動があると新聞でも報道されておりますので、そこだけを見てこれに入れたらどうかというのは、阿辻委員も言われたように疑問だと思いますね。ですから、都道府県名についての、入れる／入れないの基準というのは試案の判断でいいのだらうと思います。いろんなところから言われて多いからと言って、入れる／入れないを議論するのかなとは思いますが、でも、「鷹」まで入れると切りがなくなるという思いはしております。

同じ方の意見かどうかは分かりませんが、9/20ページに追加字種で、削除希望というのに県名がみんな出ておりますので、どういう関係があるか分かりませんが、都道府県名までは入れるというこの漢字小委員会の基準は保つべきだと思います。

○前田主査

都道府県名は入れるという基準は保った方がいいという御意見ですね。それで、「鷹」という字の場合、市を挙げて運動するというようなことでは正直言ってちょっと困る、今回はそれで済むとして、次回でということになりますと大変なことになるかと思えます。

○東倉委員

私は三鷹市に住んでいるものですから…。ちょっと意見を申し上げますけれども、自治体関係で運動があってそういうものが意見募集に現れてくるというのはそれなりに分かるのですけれども、三鷹市に生活してしまして常用漢字に入っているか、入っていないかによって日常生活に不便はないということでした、それで個人の意見として現れてこないのではないかと思われます。

○前田主査

ちょっといろんなことを申したかもしれませんが。客観的に、入れる／入れないの基準を考えた中で御判断いただければと思います。

そういうふうなことで何かほかの字についても御意見を頂ければと思います。

○金武委員

ちょっと確認なんですけれども、この字種について特に意見がない場合は、基本的には漢字ワーキンググループとしては「追加しない」ということになるのでしょうか。

○林副主査

これは最初に御了解いただいている方針をなぞることになると思いますが、ここで御意見を伺った上で、御意見の出なかったものを含めて漢字ワーキンググループで最終案という形でまとめて、ここで御審議を頂くということになりますので、御意見がなかったからと言っても、入らないことに決まりましたということでは決してございません。

○金武委員

では、最終的にはここからピックアップされた、このくらいは追加しようというような案が出る可能性もあるわけですね。

○林副主査

はい、それをまた最終案として、御審議いただくということでございます。

○前田主査

今、進め方の問題の方に話が入りましたが、追加希望の方はそれ以上ないようですので、削除希望の字種について御意見を頂ければと思います。

○林副主査

削除希望字種は、配布資料2の8/20ページからですね。

○前田主査

削除希望字種は、追加候補191字の中だと、それから現行の常用漢字表の中に入っているものとの両方を併せて御意見を頂ければと思います。

○林副主査

現行の常用漢字についての削除希望というのは、15/20辺りからございますので、事前にお送りしてありますので御覧いただいているのがほとんどだと思いますが、全体を御覧

になって削除という点から御意見を頂きたいということです。

○金武委員

数だけが問題ではないのですが、一応削除希望が6件以上ある字、都道府県名がかなり入っておりますが、これらはもう入れるということで同意が得られておりますので、これは削除しないということにしまして、後、一番多いのは「鬱（うつ）」です。これは非常に難しい漢字です。でも、「打つ」ということで今回の話題になった字ですから、私は個人的にはどちらでもいいと言いますか、なくてもいいし、あってもいいという気持ちです。

それから「顎」については先ほど歯学会からの要望があるということで、その必要性は分かるのですが、今回試案に入っているのは訓の「顎（あご）」だけですね。医学用語ではむしろ「顎（ガク）」という音を使うことが多いのではないかと思いますので、もし入れるのであれば音「ガク」を入れないと、要望は半分ぐらいしか採用できないような感じがします。現状のままでもし訓だけであるのならば、私は仮名書きでも十分分かるので、確かに難しい字ですから、削除してもかまわないのではないかと思います。

それから招聘の「聘（へい）」ですね、これも非常に難しいと言いますか、私どもがいろいろ調べてみた範囲においては、やはり読めない率が高いです。「憚（はばかる）」もそうです。読めるけれども、15番目、16番目の「挨」「拶」、これは報道界では仮名書きで十分であるという考え方で削除を希望しております。

「潰滅」の「潰（かい）」は確かに「潰瘍^{かいよう}」には使いますけれども、後の「決潰」などは同音による書き換えで「壊」の方になっています。この試案でも「決潰」の方はそちらが入っているということで、「潰瘍」の「潰（かい）」のためだけなら要らないのではないかと思います。また、次の苛性ソーダの「苛（か）」も私は削除希望に賛成します。

○松村委員

先ほどの追加の方に出ている字もそうなんですけれども、造語力ということでやっぱり考えていくということを基本として、私も金武委員がおっしゃったような字の削除に賛成なんです。

「鬱」については、この間私もちょっと現場の例として子供たちの例を申し上げましたけれども、確かに今回の新常用漢字表については書けることを前提として「鬱」を新常用漢字表に入れるということではないということは十分分かるのですが、それにしても余りにも画数の多いこの字を入れることにどれだけの意味があるのだろうかということはずっと疑問でした。

それから、この後で多分議論になるのかとは思いますが、今朝の新聞記事でおっしゃったような字が学校教育の中で、限りある常用漢字の字数を、できれば小中学校の段階で読み書きの力を付けたいと考えている立場で言えば、31番の「淫（いん）」という字、この字をあえて付け加える必要があるのだろうかとか、それから25番の「哨（しょう）」についても、これだと「歩哨」とかそういう単語なのでしょうか、ほとんど熟語としては使う場はないのではないかと、造語力ということで25番、31番は削除してもいいと思います。

個々の漢字に価値付けをすべきではないというようなことを、66番にある「俺（おれ）」の論議があった時に御指摘を頂きました。そういう価値判断を余り入れての発言はしたくはないのですが、それにしてもこの字についてあえて字数の枠のあるところに入れる必要はないのではないかと思います。

それともう一つ、先日の漢字小委員会懇談会で字体を変えることに関して、いろいろなお話を伺っていて、なかなか新常用漢字表に入る字を常用漢字表の字体にそろえるということは、かなりの問題があるということから、7番の「憚（たん）」という字、単純の「単（たん）」でしたら上は片仮名の「ツ」になるようなものが、「口」二つの形が入るということで、同じような偏やつくりが表内に混在するということを避ける上からも、この字がこれだけ削除希望が出ているのなら、私もやっぱり要らないかなと思いました。4番も同

じ意味で「聘（へい）」、これは使われる用例として少ないので必要ないというか、今回は削除に賛成です。

それから、次の13/20ページの方の一番下にある「采配」の「采（さい）」ですが、「采女（うねめ）」という、これだけではないかと思うのですが、この辺りのところも削除に賛成です。163番も同じ理由で「浅」のつくりの部分と混在することになるということで、この「箋（せん）」についても必要ないかなと思いました。

○前田主査

削除した方がいいという御意見を多く頂きました。「鬱」という字のことを前からおっしゃっていましたが、ちょっと新聞を見ておりましたら7月11日の新聞ですけれどもこういう記事がありました。「うつ病、血液検査で診断」と。どこの新聞でも取り上げられた記事だと思っんですね、これは交ぜ書きになっています。一つはこういう「うつ病」という言葉を使わないで済むのか、そうすると別の字で書ければいいわけですね。ところが「鬱」というのは、いろんな場合に使われるということが造語力という点では言える。あるいは使用頻度が非常に高いと、ある意味で公的な場でかなり使われるというようなこともあるのではないかと。私などはぱっと見ると新聞の批評というほどではないのですが、どうも見た感じがよくないなど、そういう感じがするんですね。だから、それを避けるとすれば、「鬱」という字が使えればその方がいいんじゃないかと、もちろん手で書く必要は感じておりません。新聞を作る方も手で書いている方はおられないだろうと思うのです。

私はワープロは使いませんから、みんな手で書きますけれども、今はもうそんなことは希少価値で例外だと思えます。そういうふうなこともあって、この交ぜ書きということ、あるいは表外の漢字とそれから表内の漢字との混用、そういったことも全体的に考えないといけないのではないかと考えております。これは個別の字についてではなくて、全体的なことについての私の感想と言いますか、意見を申し上げさせていただきました。

○内田委員

松村委員とはいつも「鬱」のところでは意見が分かれるのでございますが、私も、今、前田主査の言われたように、私の専門からもそうなんですけれども、「鬱」は普通に使っておりますし、やはりこれはぱっと見てすぐに分かりますので、判別力、識別力の向上という点でも、入れていただきたいと存じます。また、実際に非常にいろいろな熟語で使うことがございますので、これは入れていただいた方がよろしいのではないかと思います。手で書くことは前提にしていらないのですから。せっかくこの字がありますし、概念を端的に示してくれますので。もう一つ、松村先生の言われたように造語力で考えていく、これは非常に賛成でございます。

○金武委員

私は、「鬱」は先ほど、個人的にはどちらでもいと申し上げましたが、医学の学術用語集では今のところ平仮名書きに決まっているんですね。それでという理由だけではありませんが、新聞もいろんなお医者さんの話を書いたりしますので、うつ病に関してはよく取り上げますけれども、それは常用漢字にないからという理由もありますが、むしろ医学用語で平仮名になっているということから、平仮名を使っているということです。ただし、これが新常用漢字表に入ったときに医学用語としてどうなるかということは、また別問題です。

それからもう一つ、見た目は分かりいいというのか、何かこの画数はうっとうしいのですが、今、携帯なんかもそうですけれども、テレビでも大型の画面ならともかくとして、画面に映すとちょっと判別できなくなります。そういう点では、もし入れるなら略字体、少しでも画数の少ない略字体の方がまだいいんじゃないかという意見もあります。

○前田主査

各新聞社で用字用語集を出しておられますよね。それぞれ判断の違うところが出てくるわけですが、ああいうところはどういうふうに決めておられるのですか。これは参考までにお伺いするのですけれども…。

○金武委員

かなりの部分で一致していると思います。新聞協会の用語懇談会というところで違うものについては話し合っ、できるだけ読者や視聴者に混乱を与えないように表記は一致させようということにしております。もちろん新聞社、放送局によってこれだけは譲れないというものもありますので、完全に統一はできませんけれども、大部分は新聞用語集に基づいて統一されておりますし、「うつ病」に関しては漢字を使っているところはないんじゃないかなという気がいたします。

○前田主査

どちらかにまとめなければいけないということがあるとするば、その理由や何かを付けたり、新聞社によって違ふとかということを書いたりするわけですか。

○金武委員

新聞協会の会議の席では結局多数決というわけではないけれども、大勢がこうだということでもとまるものはまとまります。これが半々に分かれたようなものは、結局、新聞協会としてもまとめるわけには行きませんから、それぞれということになりますけれども、言葉の表記に関してはなるべくまとめるように各社とも努力しております。

○前田主査

そういうようなところを参考にしながら決めていかざるを得ないところがあるわけですが、その話はどうも余分なことで…。先ほど多くの字についていろいろ御意見を頂きましたが、そのほか…。

○笹原委員

「憂鬱」の「鬱」について、以前に文化庁国語課で「国語に関する世論調査」をされたときに、どういう熟語だったか記憶は定かではないのですが、「鬱」という字を含む語を手で書くならばどう書きますか、パソコンでしたか電子機器で入力するときにはどうしますか、どうしたいですかというようなことを調査されたと思います。その結果、手で書くときには仮名で書くという方が多くて、入力する場面では漢字にするという方が多かったように記憶しているのですが、この記憶は正しいでしょうか。

○氏原主任国語調査官

今、資料が手元がないので正確な数字などは申し上げられないのですが、あの時は「鬱（うつ）」だけではなくて、幾つかの字を聞いています。全般的な傾向として手で書くときには仮名で書くけれども、ワープロ、パソコンを使った場合には漢字で表記するというのは全体を通して見られた傾向ですね。「鬱」に関しては、強くその傾向がありました。

ただ、実際に数字としてどのくらい違っていたのかというのはもう一度確認してみないとはっきり申し上げられませんので、もし必要であれば、次回の漢字小委員会にその資料をお出ししたいと思います。

○笹原委員

確か完全に逆転した数字が出ていたと記憶しています。その「鬱」の略字ですが、JISの第1水準の方ですか26画か27画ぐらいのやや簡易になったものが確かにあるにはある

ようです。ただ、印刷物や日常での使用頻度というのは比較的複雑な方が頻度が高いという状況です。かつての古い手書き文献などを見てみると、江戸時代の蘭学者などがたった13画ぐらいで「鬱」を書いたものも見たことがあります。そこで、大学生などにこんなに簡単に書けるがどう感じるかということ聞いてみると、簡単過ぎる、「憂鬱」の「鬱」の雰囲気は全くしないという回答がほとんどでした。上の部分を片仮名のツのように三画で書いてしまうようなものなのですが、この字の場合は、その字体というものと、醸し出される雰囲気と単語の意味というのが、どうも日本人の中には定着しているように感じております。

先ほど「歩哨」の「哨」という字について御意見がございましたが、『出現文字列頻度数調査』を見たり、新聞を読んだりしていると、「前哨戦」という単語での使用が圧倒的に多いようで、「前哨戦」という単語はそれほど重要な語かどうかということは別としても、軍隊用語だけで使われるということでは現在はないということのようです。

○出久根委員

ただ今の笹原委員のお話の「哨（しょう）」ですが、これに関連しまして、例えば削除すべき文字の50番に「諜（ちょう）」という漢字がありますね。これは、「間諜」、「諜者」—スパイと言うのか、こういうもので使われます。これなんかもどちらかと言うと軍事用語ではありませんけれども、何かそういう雰囲気の言葉でして、現在はどうなんですかね、この「諜」という漢字はそんなに使うものでしょうか、これはどういうわけで入ったのでしょうか、もともとあったものでしょうか。

○林副主査

基本的に申しますと、ここに挙げてある字は、最初に、字種の選考方法として、ここでお諮りして認められたその方法に従って選考してきた結果でして、その方法に基づいて、この191字の中に入ってきているということでございます。まず、基本は、配布資料2の右欄に書いてあります出現頻度の順位ですけれども、「諜」は2246位というかなり高い順位にありまして、それでその順位に基づいて、今度は文字列で調査をいたしまして、それで先ほど前田主査も言われたような造語力その他、漢字で書いたときの、あるいは仮名で書くとか分りにくくなるのではないかと、漢字の方が分かりやすくなるのではないかとというふうな、そういう判断等を重ねて、結果としてここに出てまいりました。

それから、ちょっとついでですから申し上げますと、今私どもが審議しておりますのは意見募集で意見を頂戴するというを前提としてまとめた試みの案、それに基づいて意見募集で寄せられた皆さんや漢字小委員会の皆さんの御意見を聞いて、その試みの案にどうしても修正しなければいけない点があるかどうかということは今審議をいたしております。最初に戻ってもう一度これどうしましょうかというのとは、また少し話が違いますから、削除するような場合にもやはり試みの案としてここまで来たけれども、やはりこういう理由が新しく加わったとか、あるいは今まで軽く考えていたこういう理由はやっぱり非常に大きいというふうに思うようになったから、それで加えましょうとか削りましょうとかというふうな、そういう議論になっていくことが今までの議論の連続性ということであると、非常に大切だと思っております。そういう点から言いますと、この字に関しましてもそういう手順に従って選んできて、その結果としてここにあるということ踏まえた上で、やはりこれは削除した方がいいというようなことの、特にその理由の部分について積極的な御意見を頂くと、非常に意見募集で意見を受けたその意味が大きくなりますし、次の第2次の試みの案も非常に内容が濃くなると思っております。そういう線では是非いろいろ御意見を頂きたいと思っております。

○前田主査

寄せられた意見自体が、ある意味では私どもの期待に必ずしも沿わないところがあって、

加えてほしいというときにやはり理由がなければいけないんですね。あるいは削る場合にもその理由が欲しいわけです。具体的に言うと、自分の名前にあるから加えてほしいなどというのではちょっと困ってしまうんですね。そういう点で言うと、私どもがこれはちょっと考えなければいけないというふうに納得できるような理由の付いた意見というのが、少なくともその点では残念に思っております。そういう点で一応考えるべきところをここでは取り上げているわけですが、委員の方々が御判断なさる場合にも既に加えることにしてあるものを削る、あるいはその逆もあるわけですが、その理由も含めて御説明いただければとお願いしたいと思います。

○金武委員

先ほどの口偏の「哨」ですけれども、これは新聞界では使っております。というのは、自衛隊の哨戒機などと言うときには、これは「哨」を平仮名にする、いわゆる交ぜ書きになると、訳が分からなくなりますものですから、大分前から報道界では使っております。ただ、それを新常用漢字表に入れて別に一般に押し付けるつもりはありませんが、新聞界としては、これは交ぜ書きを避けるためにも使わざるを得ないと、そういうことをちょっと申し上げました。

○井田委員

話題の「鬱」に関してなのですが、私は個人的には自分の意見はどちらとも言えないところなんです。確かに、よく目にします、目になじんではいるのですが、このまま常用漢字表に新たに入らないと、「鬱陶しい」という字にまたルビを振って、余計うっとうしい見掛けになってしまうのかと思うと、ルビを振らずに「鬱陶しい」と書いてくれた方がまだうっとうしくないなという点では入ってもいいかなと思うんです。

ただ、その場合、もし入れるとしましたら、「これは手書きできなくてもいいんだ」というニュアンスを打ち出すべきであろうと思うのです。「常用漢字に新たに入った、これは書けなければならない」という誤解が独り歩きして行って、テストに出て書けなくて、みんな「鬱」だけ覚えて、ほかのもっと覚えるべき字がおろそかになるようなことがあつては本末転倒だと思います。この情報機器が普及した時代に書けなくてもいい常用漢字というものも想定しているんだということは、はっきりと書き込むべきではないかと思えます。

それともう一つ、私の経験で言いますと、私はアナウンサーとしてニュース原稿を読み伝えてきたのですけれども、私が仕事を始めたころは手書きでございました。そのころはうっとうしいという言葉は漢字で書いてくる記者はいませんでした。だんだんワープロ、パソコンとなりまして、やたらにこの「うっとうしい」というのを漢字で書いてくる記者が出てきたんです。自分は書けないけれども機械でポンと書けると、非常に出来上がった時に気分がいいんですね、「薔薇」とか「鬱陶しい」とか、そういう自分が書けない字ほど打ち出してくる。そして読み手の方が時にあわてるというようなことが起きました。出てくる頻度が高いというのは、恐らく、雑誌や書物の中でも打つ人が増えてくるに従って、それが打ち出せる喜びから使いがちになって頻度が高まったということが調査結果に出ているのではないかなと、自分の数少ない経験から推測しております。となりますと、本当に常用なのかという点では打てるから喜んで打っている段階での数が多いという、そういう部分も多少考える、割り引いて考えるというのでしょうか、そういう配慮も必要ではないかと思えます。

○林副主査

井田委員のお話を聞いていて、ワープロ、パソコンをお使いにならない前田主査はさぞかしそのお気持ちが分からんだろうなと思って聞いておりました（笑）。

この漢字表は、しばしば誤解がございます。漢字小委員会の委員の方々の中にはそういうことはないと思いますが、一般の方にはかなり大きな誤解があります。例えば、常用漢字

に入れるとそれを全部書けるようにしなければいけないんじゃないかなという誤解、もう一つは常用漢字にその字が入っているから、これは杉戸委員のおっしゃったことと非常に関係するのですが、先ほど杉戸委員のおっしゃったことは非常に大事なことだというふうに思っていますけれど、その漢字一字一字で考えるのではなくて、その字を使った語をもっと考える必要があるというのは、もうそれはおっしゃるとおりで、それに関して申しますと常用漢字にこの文字があるならば、この語は必ずこの漢字を使わなければいけないというふうに思い込んでしまう、これも一つの誤解でございます。「鬱」という字があっても、それは国民の多くの方々が実際に活字になったもので目で読むようなところには現にそういうものが使われているから、まあ、この範囲でというその上限を示すときにその範囲に入ってくるけれども、実際に使うときにはそこに入っているからといって、「鬱」というのは必ず使わないといけませんよというものでもありませんので、この二つの点については一般にかなり誤解があるのではないかなと思うんです。

常用漢字表に入ると全部それは書けなければいけないと思っちゃうという誤解、そこに字があるものだから、その字を使う言葉は必ずその漢字を使わなければいけないというふうに思い込んでしまうというその誤解がありますが、これは決してそういうものではなくて、国民の多くの方が読む文書につきましては、余り文字を知っているからといって難しい字が使われると困りますから、大体その上限としてこの範囲の字で書くことにしましょうというそういう目安としての決まりですから、今のような2点についての誤解はできるだけそれを解いた上で常用漢字の意義、役割に理解を求めていくということが大切だと思っております。井田委員の御発言には非常にそういう示唆の深いところがあるのではないかなとお聞きいたしました。

○金武委員

現行の常用漢字の削除希望字種ですが、15/20ページです。1位の「虞（おそれ）」ですね、これは、件数も多いのですが、新聞も使っておりません。「おそれ」というときはほとんど平仮名、若しくは代用かもしれませんけれども、恐怖の「恐」でいいわけですし、「虞（グ）」という音はないわけですね。ですから結局、「虞（グ）」があれば「虞犯少年」という言葉もありますけれども、一般にはほとんど必要ない。これは削除に賛成です。

○阿辻委員

記憶するところでは、「虞」は確か憲法に、この一文字で「虞（おそれ）」と読んでいる条文があったと思うのですが、そことの抵触はどうお考えになりますか。

○金武委員

新聞は基本的に余り考えておりません。憲法を引用するときはそのまま漢字を使いますが、引用する場合は極めて少ないわけですから、一般的には要らないと考えます。

○阿辻委員

これを削れば、憲法が常用漢字で書けないという事態が発生するわけですが、それでも別に構わないという御意見でしょうか。

○金武委員

そうですね、引用する場合はそのまま使えばよいが、一般には必要ない。要するに憲法にある字を入れたために難しい字が入っているということは承知した上で言っております。

○前田主査

それでは削除する方の字についての御意見はそこで切りまして、今度は、配布資料3について、追加音訓、追加候補191字、常用漢字と挙げられておりますが、これについて何か

御意見ございましょうか。(→挙手なし。)

○前田主査

それでは、後で思い付きましたら、また出していただくこととしまして、削除音訓について、これも追加候補の字についてと現行の常用漢字についてと両方挙げてありますが、これについての御意見を頂ければと思います。

○杉戸委員

ちょっと初歩的な御質問かもしれませんが。先ほど氏原主任国語調査官の御説明の中で、現在の常用漢字の中で「におう」という「臭(シュウ)」という漢字があり、試案で言うと69ページのところでの御説明がありまして、「におう」という訓を追加するということでした。そして、例として「臭う、臭い」があるということで、「におい」がないじゃないかという意見は問題ない、そういうことにつながったと思うのです。そのことは、常用漢字の凡例あるいは表の見方という中で、どこでどう読めばいいのかという、その点をちょっと教えていただきたいと思います。

つまり、その御説明を伺いながら69ページの左隣の68ページの上から3段目にある「呪(ジュ)」、今度入れようという案に「呪う」の例はあっても、「呪い」という例は出ていない。これは出ていないということに積極的な意味があるのかどうかということです。そのことが表の見方の方で、7とか8、9が関係するのでしょうか。ただ、それがぴったり今の私の疑問にこたえる説明がないのではないかというように思ったのです。このことが、この読みを入れる／入れないの議論に関係してくると思うので、念のために伺いたかったわけです。

○林副主査

68ページのここには「呪い」という名詞が入っていない、簡単に言っちゃうとそういうことでしょうか。

○杉戸委員

そうですね、その場合に「呪い」という、そういう名詞はどういう扱いに常用漢字表はするのかということですね。

○林副主査

その点について、漢字ワーキンググループでの議論を私の理解で申しますが、ここに、「呪い」を入れない、あるいは入れるということで詰めた議論はいたしておりませんが、ただ連用形名詞というのは機械的に全部挙げるというのも非常にわずらわしゅうございますし、特に一般性のあるものについてはここを見ると挙がっておりますので、その点で若干不統一な感じがする場合が出てくるだろうと思います。もし、ここで先ほどの「臭い」を挙げたのだから「呪い」も挙げておいた方がいいという御意見がありましたら、それはもう有り難く承って、最終案の整理に生かさせていただきたいと思います。

○杉戸委員

そういう個別の語例のレベルで出すか／出さないか、掲げるか／掲げないかを議論すればいい、そういうレベルの問題だという、そういう理解ですか。

○林副主査

飽くまでも、これは語例なものですから、できるだけ統一を取るということは考えましたけれども、特に連用形名詞についてはなかなか機械的統一が難しいということで、多少そこら辺りに見方によってはこっちがあって、こっちがないという印象を与える例も出て

きてしまうということでございます。だから、もし個別論としてこれは挙げた方がいいよというようなことを言っていただけると有り難い、そういうことでございます。

○杉戸委員

「臭い」の方が日常的で「呪い」は非日常的だということは分かります。

○林副主査

その辺りの判断が難しいのですが、結果的にそういうふうになっておりますね。

○杉戸委員

そういうような判断の下で、例として挙げる／挙げないをやっているのであれば、そのことを1ページ、表の見方の7, 8, 9辺りに少し書いてはいかがでしょうか。

○林副主査

御趣旨は非常によく分かります。その点では賛成なんですけれども、実は、この語例はもともとの常用漢字の語例もあって、その中にこれを溶かし込む形でやりますので、もともとの常用漢字にある語例はこれを全部…ある程度は常用漢字表そのものが定着しているところから、もう逐一それを検討吟味するということは事実上難しくございましたので、それと併せますとなかなかそのところはやりたくても難しいというそういう実情にあるということをお理解いただければと思います。

○杉戸委員

分かりました。

○武元委員

今の問題ですけれども、恐らく、連用形名詞というのは語例にも挙がっていないと思うのです。例えば「志す」の「志（こころざし）」と「光る」の「光（ひかり）」と、後「次ぐ」の「次（つぎ）」ぐらいでしょうか。送り仮名が変化するものだけがどうも語例として挙がっているのではないかと私は理解しております。今の連用形名詞のものを音訓に掲げると、これは原理が崩れるのではないかと私は思うのです。

○林副主査

その点はもう一度見直しておきます。

○氏原主任国語調査官

今の点は表の見方の1ページ、番号で言いますと8番ですね、ここが関係しています。8番のところに「なお書き」がありまして、「なお、次のような類は、名詞としてだけ用いるものである」ということで、例えばそこに「印」というのが出ていて「しるし」と書いてあります。そして「氷 こおり」というのが例として挙がっています。具体的に申しますと6ページ、7ページをお開けください。これは一つの約束事でありまして、例えば、今の6ページの「印」ですけれども、音が「イン」で「印刷、印象、調印」とあります。その下に訓として「印（しるし）」、「目印」、「矢印」とあります。

ここで名詞の形で掲げているものは、動詞としては使えないという約束事があります。ところが、動詞の形で掲げているものは、右側の7ページを見ていただきますと、非常に分かりやすいのですが、例えば、下から二つ目に「いとなむ」という動詞の形があって、そこに「営む」と「営み」が挙がっている。それから、その一つ上の「さかえる」には、「栄える」と「栄え」という形が挙がっている。その上の「映画」の「映」には「映る」という動詞の形で挙がっていて、「映り」という名詞の形も挙がっています。ですから基本

は動詞の形で挙げているものは、連用形の転成名詞としても使うことができるという意味合いで、名詞の形を語例として挙げているものが多い。

ただし、これはどうしてそうなったのか分からないのですけれども、常用漢字表の中にすべて挙がっているかという点、中には挙がっていないものもあります。ですからそれを見ると、たしかに不統一というようなイメージがあるのですが、これは表の見方のところですべてを挙げているものではないんだというようなことが書いてありまして、その語によっては挙がっていないものがあるということが書かれています。今の7ページのようなもので言えば、先ほどの「呪」のところも「呪う」の後に「呪い」という名詞の形を、「営む」「営み」、「栄える」「栄え」、「映る」「映り」とか、更に「およぐ」のところは「泳ぐ」「泳ぎ」とありますので、それらのように挙げておいた方が整合は取れると思います。

ただ、今、申し上げたようにもともとの常用漢字表の挙げ方がきれいにそろっていないんですね。ですから、細かいところを見ていきますと、その手のものが幾つかあって今回どうしようかということが、実は漢字ワーキンググループの中でもかなり議論になったのですけれども、原則は常用漢字表に挙がっていて、今そういう問題が非常に大きな問題として起こっているわけではないので、なるべくこの現行表の形を引き継ぐと言いますか、それを尊重して特にいじらなければいけないもの以外は手を加えないというような方針で進めております。

したがって、常用漢字表にもともとあった、ある意味での不統一がそのままこの表の中に残っている。そして、新たに加えたものについてもそれと同様の問題が生じる。これが一番正直な言い方であると思います。そこまで詰めて、本当にきれいにしようと思うと、かなり手を入れざるを得ないのですが、それはどうなのか、つまり常用漢字表としてもうこれだけ定着してきているものについては、可能な限りそのまま尊重していく方がいいのではないか、というのが漢字ワーキンググループの基本姿勢であると思います。

○杉戸委員

念のためですが、御説明のあった「印（しるし）」とか「氷（こおり）」の名詞系は送り仮名がない、送らずに名詞系として使うというそういう例ですね。そのことで、ちょっと別のグループのことだということになります。

それからもう一つは、是非できるだけ整理をしていただきたい。特に今度追加する文字でその不統一が残らないようにという、そういう希望を持っております。

○前田主査

実際問題としては、今は常用漢字表の話がありましたけれども、常用漢字表自体については私どもが見ていて不統一かなと思うようなところはないわけではありませんし、当用漢字表になればなおさらです。ただ、その時代の人がそういう判断をしている、しかし、その理由ということが明確に書かれているわけではない。私どもがそんたくしているわけですから書いていいものかどうかと迷う場合もあるわけですね。

少しずつ漢字表も進んできているというふうには私は考えたい。今できる範囲でより進んだ形にしたいというふうには思いますけれども、これが一般的に通用する言葉か、それともそうではないかというところには連続していてどこで切るかというところに非常に難しい問題が出てきますし、もちろん人により時代により違うわけですから、なかなかこういうところは今の段階でといっても議論になってしまう場合もあるわけですね。いろいろ御意見を頂ければそれについていろいろと話し合ってみて、どの辺りが適切かということも考えていきたいとは思っております。その点では限界も当然あるように、時間的なこともあるように思います。

それでは、表の削除それから追加などの問題である配布資料2及び配布資料3について御意見を頂きましたので、これらについては漢字ワーキンググループの方でまた考えさせていただいて、一定の判断をしていきたいと思っております。その点、御了承ください。

Ⅱ 配布資料4についての協議

○前田主査

次に、配布資料4に入りたいと思いますが、その前にこの後半の協議の目的について、氏原主任国語調査官から説明していただければと思います。

○氏原主任国語調査官

具体的な資料の説明は高木委員から頂くということですが、前回の漢字小委員会の時に、松村委員から運動会に行った時に「鬱」という字は書けないから入れないでほしい。」とある生徒から言われたということが紹介されて、漢字ワーキンググループの中でも話題として取り上げました。その中で、国語教育のことを考えたときに今のこの試案で、例えばこういうところを改善しておいた方がいいのではないかとといったところがないのかどうか、時間を取って検討した方がいいのではないかとということになりました。もちろん、ここは文化審議会国語分科会ですので、国語教育のことを直接検討する場ではありません。ですから、国語教育そのものに踏み込んでいこうということではなくて、新常用漢字表が決まれば、いずれ国語教育とも関連してきますので、そういう観点から見てこの試案について改善すべき点がないのか議論したいということでございます。

先ほど、井田委員からも例えば「鬱」については書けなくてもいいというようなことを明確にどこかに書き込んでおいた方がいいのではないかと御指摘があったと思います。それで例えばですけども、試案の前文のところ、(6) ページのところを御覧ください。ここは2番として「新常用漢字表(仮称)の性格」というところで(1)基本的な性格、(2)固有名詞に用いられる漢字の扱い、というふうになっています。実は、この(1)のところ、最初の段階では、今、御指摘があったように、この漢字表の漢字のすべてを手で書けることを前提するものではないというようなことが書かれていた時期があります。ただ、いろんな経緯があってその文言は今削られているわけです。例えば、この前の松村委員のお話ですとか、今の井田委員のお話などを伺うと、そういう削ってしまった記述を復活させた方が望ましいようにも思われます。そういった学校教育との関係を踏まえて、試案を見直す。これまで余り時間を取って議論をしてこなかったの、そこを議論したいというのが後半の議論の目的です。

ですから、その辺りのところを少し…。最初に高木委員に問題提起するような形でお話しただいて、そういったところは試案としてどう考えているのかとか、あるいは今ちょうど見直しをやっているわけですから、学校教育等を考えたときには、ここは見直した方がいいのではないかと、そういったところを是非議論いただきたい。実は、6月22日に漢字小委員会懇談会があって、その最後のところでそういう議論の機会が持てればということがあったのですけれども、出席をなさった委員の皆さんは御承知のように時間がなくなってしまったということでできませんでしたので、それで、今日の段階でこういう形で時間を取っていただいたということでございます。

○前田主査

それでは、配布資料4についての説明を高木委員にお願いいたします。

○高木委員

今、氏原主任国語調査官のお話を受けまして、この席は一般の社会生活における現在の国語を書き表す場合の漢字使用の目安ということで話されているという大前提に立った上で、学校教育の中で漢字指導を行う上で考えるべき視点の提示を行いたいと思います。

まず、学校教育の現状のところを少しお話するために、1と2で学習指導要領、1では

現行版の学習指導要領，2では小学校が平成23年度から，中学校が平成24年度から使われる学習指導要領に沿って説明し，そしてその後，そこから出てきました問題点，課題についてお話を申し上げたいと思います。書かれていることを読むというのは少し繰り返しになって恐縮ではございますが，大事な点もございますので，ポイントを幾つか読みながら御説明をいたします。

1/7ページのところの平成11年度学習指導要領，小学校・国語でございます。現在の小学校・国語の学習指導要領では，指導すべき内容につきましては1・2年，3・4年，5・6年という低・中・高の学年に分かれております。現行版は漢字指導については「言語事項」の中に書かれております。言語事項(1)の(イ)のところ，そこにまず，平仮名及び片仮名を読み，書くという下に(イ)といたしまして，「第1学年においては，別表の学年別漢字配当表の第1学年に配当されている漢字を読み，漸次書くようにすること」，このことは配当されている漢字は読むことはその学年，当該学年で行い，そして書くことについては上学年においてほぼ書けるようにするということが大枠として決められております。したがって，2年生も同じような書き方になっており，3・4年生も同じ書き方になっております。

5・6年ということで，特に6年生で一つ問題になってくることは，例えば，中学入試で漢字の書き取りをどこまで出すかという問題です。それは，3/7ページのところに書かれています第5学年までの漢字の書き取りは出してもいいけれども，6年生のは出せないという形に現行ではなっております。要するにこのことは，2/7ページの「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」にも書いております，あのところです。学年ごとに配当されている漢字は，児童の学習負担に配慮しつつ，必要に応じて当該学年以前の漢字，又は当該学年以降の学年において指導することもできることということです。それから当該学年より後の学年に配当されている漢字及びそれ以外の漢字を必要に応じて提示する場合は，振り仮名を付けることというような学習負担についても書かれております。

2/7から3/7ページに提示いたしましたものが，学年漢字配当表でございます。これは，3/7の一番下に書いてございますように，初出は昭和33年度版学習指導要領からで，このような学年別漢字配当が示されております。

また，この学年別漢字配当表の字体でございますが，楷書体を筆写体風に修正した字形を標準として示しております。そのことは手書きの文字ということの指導にこれが生きるということで，楷書体をこのような形にしております。特に現状といたしましては，この学年別漢字配当表を基に，この筆写体風を基にしながらかい一点一画，止め・はらいに注意して現在は指導されているということがございます。

4/7ページへ参ります。現行の中学校の学習指導要領の漢字についてでございます。ここでは現行は中学1年生と2・3年生が一つの括りになっております。そしてその中で小学校の6年生の漢字が書けるようになり，そして，その上に常用漢字のうちの250字程度から300字ということですが，この常用漢字の字については指定がございません。例えば教科書で言うならば，それぞれの教科書によって選ばれてきている漢字は違っているということになります。それぞれの教科書によって配当されている漢字が違うことになります。

全体といたしましては，1年生では900字ということになりますし，2・3年生は下の学年のところに書いてございますが，第2学年としては第1学年までに学習した常用漢字に加え，その他の常用漢字のうち300字程度から350字程度，3年生がそれに加えて大体が読めるというふうになっております。書きの方がイのところ示されておまして，950字程度の漢字，さらには3年生で言いますと，学年別漢字配当表に示されている漢字を書く。要するに1006字は必ず書き，それを文や文章の中で使うというふうになっております。

高等学校におきましては，現在現行版では国語表現Ⅰと国語総合の中で使っておりまして，共に常用漢字の読みに慣れ，そして主な常用漢字…ここが「主な」ということが非常に難しいところなのですが，何を「主な」と言うのかというと非常に難しいところでございますが，主な常用漢字が書けるようにするということになります。このことは実は大学

入試に大きく影響しておりまして、大学入試の漢字書き取りは常用漢字の範囲内から出すというふうに、現在多くの大学で行われているというのが実情であります。この制限で、1945字の中から書き取りの試験を出しているというふうになります。

5/7ページは平成20年度、昨年3月に出了された小学校学習指導要領とそれから本年3月に出了されました高等学校のものを持ってまいりました。大きい変化はございませんが、中学校の方が、学年配当になっておりまして、6/7ページのところですが、中学校は今回、中学1年、2年、3年と分けて記載しておりますので、その中の常用漢字の配当が変わっております。中学1年ではウの「漢字に関する事項」でございますが、

(ア) 小学校学習指導要領第2章第1節国語の学年別漢字配当表に示されている漢字に加え、その他の常用漢字のうち250字程度から300字程度までの漢字を読むこと。

(イ) 学年別漢字配当表の漢字のうち900字程度の漢字を書き、文や文章の中で使うこと。

ここでもどの常用漢字を書きということの指定はございませんので、それぞれの教科書に合わせて漢字配当が決められています。もう少し具体的に申し上げますと、現行の中学校5社の教科書が出ておりますが、それぞれの教科書会社の配当はすべて異なっているということになります。

同じように2年生が300字から350字程度、3年生が「漢字に関する事項」の(ア)のところ「第2学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常用漢字の大体を読むこと」というふうになっておりまして、大体読めるということになります。これもどの漢字が読めるとか、読めないという指定はございません。「大体」という、この言葉がいいか悪いか難しいところだと思います。

高等学校に関しましても、今回は国語総合が必修になっておりまして、ウの「漢字に関する事項」に関しますと、(ア)常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字が書けるようになること。というふうになっております。

繰り返し申し上げますが、書けるようになることを求めているということでございますので、現在は1945字の漢字が書けるということで大学入試の書き取りの試験に出てくるということになります。この辺りのことは、先ほどの井田委員の御発言、さらには氏原主任国語調査官の御発言等も勘案しなければいけないことであるかなというふうに個人的には考えております。

7/7ページへ参ります。これは先般この漢字小委員会でも決定いたしました「都道府県名漢字について」でございます。新たに11字が加わり、現行のものと合わせてということになっていきますが、都道府県の学習をするのは平成20年版で申し上げますと小学校の4年生、「3年生・4年生」と書いてありますが、これは4年生です。3年生は市町村レベルまでで4年生になりますと県レベルへ行きますので、県のことが問われてまいります。ただ、このようにいろいろ教科書等を見てきますと、4年ですべての県名の漢字ということではございませんので、これは参考のところにお示ししてございますが、この辺りも今後の検討課題であるという形になります。ですから、県名ということがすべて4年生だけではないということで、学年別の漢字配当について、さらには常用漢字の中で中学以降、どの漢字を教えるかということも検討課題になってまいります。

4番目です。現行の学校教育の立場から見ました状況について少し私の感じているところを申し述べたいと思います。

まず、子供たちはどこで漢字に出会うかということを考えますと、学校教育で国語を中心にしながら様々な教科の教科書を通して学んでおります。先ほど申し上げました学年別漢字配当表ですが、ある意味で、あれは国語の教科書のためにあるのではなくて、すべての教科書で使用していくための漢字が示されているものです。例えば、小学校2年生で三角形というのが出てきます。それは1年生で「三」という字を習い、2年生で「三角」が出てくるから2年生に「角」が配当されている。そういった形のもので、世の中によく

誤解されていて、この学年別漢字配当表はその学年で国語に必要な漢字というとらえ方がございます。そうではなくて学校教育全体の中でどういった漢字を押さえていくかということが、この漢字配当表には示されているというものでございます。

話を元に戻しますと、子供たちは教科書を通して、まず漢字に出合うという事実を学校教育としては押さえたいと考えております。4番の二つ〇印でございますが、これも今お話しした内容と重なります。申し上げてきたように教科書が最初に出合う漢字であろうというふうに思います。それを次に手で書きながら字形や字体を覚えていくということで、小学生にとっては、特に入門期の文字指導については手書きの文字というのが、その中心になるということになります。したがって、様々な字形が出てくることによって、指導の難しさや子供たちの漢字習得に混乱がないことを期待しております。そのことと重なりますが、下の(1)のところに書いてありますが、字体に関しては、同じ字体で教育した方が混乱はないだろうと考えております。

学習するには基準が必要です。様々な基準が出ていますと、どの基準で書いたらよいかなかなか分かりにくいということで、現在はこの基準を学年別漢字表においております。したがって、学年別漢字配当表というのは先ほども申し上げましたが、楷書体を筆写体に修正しているというものでございます。特にここにも、小学校、中学校、高等学校の委員の皆様が出ていらっしゃるんですが、例えば、書き取りのテストにおける混乱、はねをどうするかとか、かなり小学校の先生は一点一画を重視しながら指導を非常に丁寧にされております。

そういった現状から見ますと、字体の許容ということでどこまでを子供たちに許容するか、小学校段階でどのような指導をするかという問題も起きてくると思います。特に学習における手書きということが、この後、学校教育の方で問われてくる。そういったことの中で出てくる問題といたしましては、画数の問題であるとか明朝体活字と筆写体活字との違いの問題であるとか、さらにはデザイン化されている字が出てくる。最近小学生でも携帯電話を持っていますから、デザイン化された文字は見慣れているかもしれませんが、どういった字を学校教育の中で教えていくかということが、一つこれから考えていかなければいけない問題だととらえております。

(2)「教育上、学習指導上指導が難しい漢字」ということで幾つか挙げてみました。ここまでいろいろ議論されていることですので、屋上屋は繰り返しません。

(3)ですが、ここで今話されている常用漢字というのは、一般社会で用いられている漢字ということがここで考えられていることなのですが、学習漢字との乖離ができるだけ少ない方が学校で学んでいる子供たちには混乱が少ないというふうに思っております。

(4)として、字数が増えるということ、1945字から2131字という約200字増えるとこれをどこで吸収して、学校教育の中でやっていくかということで、基礎学力の低下とかいろいろ言われる中で、この漢字指導…私は学校教育の基礎は読み書き算だけとは思っていないのですが、特に読み書き算と言ったときに読み書きの問題を学校教育の中で引き受けるとなると、学習者へ負担が増すのかなという感じも持っております。

(5)として、できましたら是非学校教育における漢字指導の現状をきちんと押さえ、そして実態の把握をしてみる。ここにも学校現場の委員もいらっしゃいますし、できましたら文部科学省の教科調査官等も、この漢字については大変詳しいことを御存じですので、そういったヒアリング等も含めながら、この問題について今後考えていけることができればいいと考えております。

○前田主査

どうもありがとうございました。御意見を承ることは後にいたしまして、まずは、ただ今の御説明につきまして、何か疑問の点などがありましたら、それを出していただければと思います。

○阿辻委員

お尋ねしたいことは、4/7ページで、第1学年、第2、第3学年の(2)のアとイの区別です。アは読むこと、イは書くことということ、そう理解すればよろしいのですか。

○高木委員

そうですね。

○阿辻委員

はい、分かりました。

○杉戸委員

最後のページ7/7ページの下から4行目、(3)日常生活上の漢字と、学習漢字との乖離^{かいり}への配慮ですが、この乖離というのはどういう側面の乖離を問題視されていたのでしょうか、字種とかいろいろな観点があると思うのですが…。

○高木委員

基本的な考え方といたしましては、現行の学校で習う漢字と違う漢字がたくさん出てくることによる混乱を一番心配しております、そのことについて、乖離という表現をしました。子供たちは学校で習う漢字と違うじゃないかと言ったときに、どっちが正しいのとか、どっちを書いたらいいのとか、そういったことに対して乖離という言葉を使いました。

○杉戸委員

そうしますと、特に字体の問題、点画の問題、あるいは読みとか用法とかいろいろありますが…。

○高木委員

一概に焦点を絞ってというのはなかなか難しいのですが、繰り返しになりますが、今日レポートさせていただくことにつきましては、要するに学校教育からこの常用漢字を見たらどうなのかということのレポートでございますので、字体だけではなくて音訓の問題とかいろいろ出てまいりますので、それがだんだん距離が遠くなれば遠くなるほど子供たちの学習には負担が増えてくる、そういった意味で御理解いただければと思っております。

○杉戸委員

分かりました。

○阿辻委員

同じところで、今、杉戸委員がお尋ねになったところですが、学習漢字というのは、どのような意味で使っていらっしゃるのでしょうか。

○高木委員

学校で習う漢字、教える漢字です。

○阿辻委員

それは常用漢字も含めてでしょうか。

○高木委員

今は、常用漢字がすべて入っていますから…。

○阿辻委員

要するに、中学、高校で、教科書で習得する漢字という意味でしょうか。

○高木委員

教科書でということにはなっていないんですね、常用漢字を習得するという形で中高はやって来ていますから。

○阿辻委員

常用漢字は全部じゃないですよ。

○高木委員

はい。「主な」とか「大体」とか、そういう言い方になっていますね。

○阿辻委員

そうしますと、小学校で習う1006字プラス主な常用漢字の集合ということですか。

○高木委員

ええ、現行の指導要領で言いますと、この「主な」というのはなかなか難しいところでございまして…。

○阿辻委員

それをここでは、学習漢字という名称で呼んでいらっしゃるということですね。

○高木委員

ええ、今の私の言い方ですとそうなります。ですから、「主な常用漢字」というのは、ほとんどの常用漢字が含まれているというか、すべてと言ってもかまわないと思うのです。

○阿辻委員

分かりました。

○内田委員

御説明では学習漢字との乖離と言われたときに、やはり杉戸委員と同じ質問なんですけれども、2点しんにゆうか、1点しんにゆうか、字体の問題に限って例を挙げられましたので、そういうことでよろしいんですね。

○高木委員

それについては、上の「字体に関して」ということで、②のところに画数の違い、明朝体活字と筆写体活字との違い、それからデザインの違いというように、単純に、2点しんにゆうであるとかないとか、そういうことだけではないものですから…。2点しんにゆうはどうかというような個別の問題だけではなくて、特に常用漢字と、私が今申し上げてきた学校で習う漢字、これは学習漢字という言い方を今していますが、それとの距離がどの程度出てくるのか、その距離が出たときに学校教育の中で子供たちが混乱していくということを避けたいという、そういった思いからの表現でございまして。

○内田委員

それと字数が増えることへの学習者の負担というのが、やはりちょっとよく分からないのですけれども、「主な」とか「大体」ということで常用漢字に入っているものの中で学習漢字として取り上げるものというのは、もう字数も大体決まっていられるようですか

ら、ここで、1945字が2131字に増えたところで、それで学習者の負担というのがあるのかどうかというところが、私にはよく分からなかったのです。全体の御説明は、非常によく分かったのですけれども、そのところがちょっとよく分からない。

○高木委員

委員の中にも小学校の先生、中学校の先生、先生の御経験があった方がいらっしゃるの
で、後でお答えしていただきたいのですが、現行の小学校、中学校、特に小学校の場合にはここに示されております学年別漢字配当の中で教えるのですが、例えば、小学校2年生ぐらいから本当にこの中の半分も書けないような子供もおりますし、そういった中で高校まで行って約200字増えたときに、子供たちの学習負担というのは、私は当然出てくると、常用漢字そのものが200字増えれば200字だけ、子供たちの負担は増えてくるというのが、教育に携わる者としては目に見えてくるというところでございます。

○濱田委員

7/7ですけれども、4番目の(2)「教育上、学習指導上指導が難しい漢字」ということで例を挙げていますが、これらについては学校の何年生かで実際に教えられるのかどうか。もう一つは、現在、この漢字表の中にそういう漢字はないのかどうか、その辺りを御質問したいと思います。

○高木委員

現在は常用漢字に入っていないものはやっていません。主にこの辺の字ですと高等学校ですが、例えば「淫乱」の「淫」をどうやって教えるかというのは教える側の教師も非常に苦慮するところであると思えますし、「淫」という字が入っている教材というのはなかなか探すのに苦労するというところで、教材外の外字として、要するに常用漢字に入れば現在
はすべての漢字を教えておりますので、全部覚えなさいよという指導を高等学校終了までには一応行っています。ただ、それが覚えられるか、覚えられないかは大変難しい教育上の問題がございまして、様々な学校もございまして、問題を抱えている高等学校とか、様々なことがありますので、すべてできるとは限りません。

ただ、逆の言い方をしますと、先ほども申し上げましたが、大学入試では常用漢字を書き取りの漢字に出していいという判断をします。私は大学人でございますので、大学の、例えば試験に出すときには常用漢字の中から出すということにしております。

○阿辻委員

都道府県名の漢字の実情について、7/7で教えていただきたいのですが、3年生、4年生で白地図にまとめたり、都道府県の名称や位置を学習するというのが社会科という科目であるのだそうで、その上に出ております岡山とか熊本とか茨城とか、今回常用漢字の候補になっている地域の子供たちは自分の所属する県の県名なんかはこれまでどうやって学習しているのですか。

○高木委員

平仮名です。

○阿辻委員

平仮名ですか、例えば、熊本県の子供の4年生は自分の県を「熊」は平仮名で書いて、「本」と「県」は漢字で書くのですか。

○高木委員

はい、そうです。

○阿辻委員

都道府県名も交ぜ書きですか。

○高木委員

そうです。

○阿辻委員

そうですか…，分かりました。

○前田主査

だんだん意見の方に入ってくるかもしれませんが，邑上委員もそうですか。

○邑上委員

補足というか，実態を補足したいので…。

○前田主査

はい，それでは実態の方で。

○邑上委員

教育について語る場ではないということで，大変いつも苦しい思いをしておりました。今回こういう機会を頂いて本当に有り難く思います。実情としては教育を語る場ではないけれども，本当にどこで漢字を子供が習得するのかというと，小学校が本当に出発でございます。この資料4に書かれている，学校教育の立場から見た常用漢字ということについては，高木委員が御意見をまとめていただいたことに基本的に私も賛成でございます。

今回，この試案の中に加えていただきたいのは，いつぞや内田委員もおっしゃっていた手書きの重要性の辺りをもう少し丁寧に書いていきたいなと思っていることがございます。実際に子供たちの授業時数が大変今厳しい中で，この国語分科会の常用漢字の回答が学校教育全体を揺るがして，行く行く文部科学省が時数を増やしてくれたら，こんないいことではないのですが，大変厳しい中で今子供たちが1006字の学習をしております。そして小学校では基本を学習しますから，許容とか，これもいいよ，あれもいいよというのは，大変難しいのです。そういう中で担任も指導をするときに，止めなさいといたら止めて指導をいたしますので，どうしても最終的にテストのときに丸を付けるとしても，子供たちに迷いがないように基本を教えるざるを得ません。そういうような実態の中でこれ以上漢字が増えたりしていくことは厳しいなと思いました。

ただ，小学校には影響ないんじゃないかというお話がいつぞやありまして，中学校が確かに大変になるかなということをお前からすごく感じておりました。で，小学校の現場ではとにかく丁寧に教えております。本当に内田委員がおっしゃったように，まずは教えなければいけないということで丁寧に教えておりますが，ただ，この御時世大変厳しい実態も多々抱えております。そして，先ほど阿辻委員がおっしゃいましたように，子供たちには習わない漢字は書かせられませんので，まじめな先生は自分の名前もまだ習っていないときは交ぜ書きにさせるんですね。それが実態です。家庭で教わったら学校で習ってなくても，漢字を使っていいというような指導をしてくださいね，ぐらい言わないと，交ぜ書きになってしまう。学習指導要領をきちっと伝えて行こうという教員が多い中では，そんな実態があります。

これは指導の問題であると言われそうですので，そういう工夫を今後しなければいけません，ここに書いてあるような，特に画数の違い，それから手書き文字と実際の文字の違い，これは小学校においてはデザインの違いというような許容ができない実態がござい

ますので、できるだけ統一していただきたいと思います。そして先ほど言いましたように、漢字を手書きすることの重要性について、大切な文化であるというところで、できればここをもう少し習得に関するところを増やしていただき、もう少し丁寧に書きたいなと思っております。

○金武委員

ちょっと質問ですけれども、「教育上、学習指導上指導が難しい漢字」の中に、「籠^{かご}」が入っておりますけれども、これは字画が多いということですか。

○高木委員

そうです。

○金武委員

ついでにこの字は「かご」という訓が試案には入っていませんが、この字をもし入れるというのであれば、「かご」があった方が意味が分かるような気がします。実際に「籠(かご)」は平仮名で書いてもいいのですけれども、これは、確か「籠^{ろう}」と「籠^{ろう}もる」しか入っていませんので…。

○前田主査

それでは、自由に意見を交換していただく方に入りたいと思います。

○阿辻委員

それでは個人的な意見を述べさせていただける状況ですので、お尋ねいたします。7/7の4番のところで「子供たちは、学校教育を通して、漢字を習得しているという事実」、2番目は「子供たちが活字として漢字に出会うのは、教科書」とあります。おっしゃることは分かりますが、果たしてそれは本当にそうでしょうか。それと2番目の○の「子供たち」というのは小学生に限定していらっしゃるのでしょうか、中学生は、果たして本当に漢字に出会うのは教科書でしょうか、様々な書物というのは当然中学生になれば、むしろ教科書以外のものの方が多いのではないかと。私個人は明らかにそうでありました。教科書なんてほとんど読んだ覚えはありません。

果たして本当に漢字に出会うのは教科書だけでしょうか。小学生の子供たちにとって、電車や町の看板やラーメン屋に入ればメニューというようなもので、町の中に漢字はあふれているわけです。そのあふれている文字の現実と教科書で1006文字について掲げられている規範的な字体と、その整合性を子供たちが取れるはずはないだろうと、私は思います。確かに小学校でシステムティックに漢字を教えられることは大変重要なことだと思います。でも、それがすべてだというふうには私には思えません。

それからもう一つ、子供たちにとって、一般の社会の現実と乖離している、学校で習う漢字が現実の社会と乖離していると、それはおっしゃるとおりだと思います。では、その子供たちが習う漢字に世の中を合わせるのか、それはどちらがメインでどちらがサブなのかということも、ちょっとお考えをお聞かせいただきたいと思います。

○内田委員

私も全くその意見に賛成でございます。やはり、乖離しているものを見ることが、メタ言語意識を養う上で非常に大事です。小学校の高学年からやっぱり自分たちが今使っているその言語をしっかりと対象化し意識化するためには、現代で使用している言葉とは違うものに出会うことが大事です。そこで古典とか外国語というものに触れる。あるいは方言を大事にするというふうなことを今度の学習指導要領には盛り込みました。そして言語力育成会議では、やはりメタ言語意識が大事であるというふうなことで、5か所ぐらいにわ

たってその言葉を入れました。それが一つです。

それからもう一つは、子供だけではなく大人もそうなのですけれども、およそ学習していくときに一番基本になる原理はコントラスト・プリンシプル（対照原理）です。やっぱりそれは一つのものだけを固定的に教えるのではなく、それと違うものと対比させることでそのものがはっきり認知できるという仕組みになっているということで、乖離があるということ自体がむしろ望ましいことと考えられます。

子供たち、特に小学校の高学年ぐらいからたくさん読書をする子供たちというのは非常に難しい文字を読めます。実際に私などは部外者として子供たちのテストに各学校に入っていくわけですが、「あっ、これは字体が違うね。」「僕たちが使っている教科書体とは違うね。」というようなことを言います。「あっ、よく見ているのね。」と、私はそれについて言うのですけれども…。子供たちはちゃんと違うということを言いながら、しかも「これは学校では書いちゃいけないと言われていたけれども、これ書いてもいい。」ということで、難しい漢字を書くことに大変喜びを持っているというふうなこともよく感じます。ということで、阿辻委員と全く同じでございます。

○林副主査

今、阿辻委員、それから内田委員のお話を伺いまして、私も同様の感じは持っておりますが、一方、高木委員に今日、御説明いただいたこの資料を見ると、私も非常によく分かるところがたくさんございます。

その乖離ということと言いますと、ここに一つの問題があるのではないかと私は思っているのですが、というのは、それを御覧いただくには1枚戻っていただいて、6/7を御覧いただきますと、小学校、中学校までの指導要領と高校の指導要領の間には飛躍と言いますか断絶がございます。違っていたら高木委員直してください。私もこういう役を承っている立場から十分とは言えないまでも、こういう点について少し個人的にもこれまで調べてはきておりますが、やはりどういうところに飛躍があるかと言いますと、分かりやすいので字数で申しますと、例えば、書けるようにする字というのは中学校の段階までは最大…学年別配当表の1006字、ですから1945字のうち900字ぐらいは中学校の段階では書けなくてもいいという、結果的には指導要領もそういうことになっておりますね。

それから読む漢字に関しても常用漢字の大体は読むこととなっておりますが、これは、^{あひまい}大体というのはもう高木委員のおっしゃるとおり、どこの線までが大体かというのが曖昧なのですが、ただ、私はこういうふうな書き方しかできないし、これまでの指導要領はともいろんなことを考えてお作りになっているというふうに個人的には感じておりますが、結果としてはそういうふうになっています。ところが、高校にいくと6/7の一番下のところに明確に書いてありますけれども、「常用漢字の読みに慣れ」と、これで高校までには全部読めるようにしなければいけないっているんですね。それから「主な常用漢字が書けるようになること」と、ここのところも余りはっきりいたしません、こういうふうな状態です。

実情から言うと、小学校、中学校と高校との間にはかなり違いがありまして、指導要領に違いがあるだけではなくて、子供の発達段階でもかなり違いがあって、高校生というともう大人に近づいておりますので、小学校、中学校と同じような感覚で教育的な配慮ということを非常に濃厚にやらなくても案外一人前の感覚として世の中のことを見たり、それからそういう世の中の物事に慣れていくという力がある、批判力も当然出てきております。この辺り、私は大きな断絶があるというか飛躍があるというか、大きな境目があるというふうに感じておりました、それを基にしてこの乖離ということを見ますと、小学校、中学校だとやっぱりこういうことは恐らく現場の先生方も非常に気になられるのだらうと思えますね。文字はたくさんありますけれども、その中で、小学校や中学校でどういう漢字をどういうふうに教えていくかということになると、常用漢字全体をやっぱり意識せざるを得ない。そこの乖離というものをどういうふうに学校としては考えたり、教育の中で実践

をしていくかということで悩まれるというのは、私は非常に分かります。

ただ、小中学校だけではなくて文字習得という全体を考えますと、私は、実は文字の習得というのは学校で全部覚えて、社会に出てそれを使うというふうにきれいには分けられないと思います。単語もそうですし、敬語みたいなものもそうです。基本は学校で覚えるけれども社会に出て必要に応じて覚えていくという要素が非常に大きいですね。特に言語習慣にかかわるもの、これは、世に出て覚えることの方が非常に大切だし、必要なことが非常に多いと思う。そういうふうに広く一人の人間が一生の間にどういうふうにして言語能力を獲得していくかというこのプロセス、内田委員を差し置いて非常に差し出がましい話ではありますが、そういうことを考えると、かなりこの辺りは、弾力的にいろんな方法を講じる余地を考えながらやっていく、考えて結論をまとめていくということが非常に必要だろうというふうに思っておりますので、そういう点で高木委員のお話は非常に示唆のあるお話であったと、私はそういうふうに理解をいたしております。

○納屋委員

私も高等学校の方の立場から来させていただいているのだと思っておりますので、高木委員がおっしゃったことについて、現場の方で教える立場からしたら、こういう常用漢字の字数が増えるということに対して、基本的に負担が多いだろうということを感じます。感じますけれども、それは学校でやっている指導の時間数との関係、それから、他の業務との関係というようなことから感じるということを申し上げているわけなのです。

ただ、私もしっかりとした理解ではないものですから、こんなことを質問して悪いのですけれども、新常用漢字表に関する試案ですが、この試案の形で、常用漢字表が完成ではございませんですね。つまり、例えば後ろの付表の部分なんかはまだちゃんとしていないですね、ということはその付表の部分が付きますよね。この部分は質問なのですが、基本的な考え方というのは常用漢字表そのものに載るでしょうか。

○前田主査

質問のところを、もう一度お願いできますか。

○納屋委員

この試案の緑の表紙のところの「Ⅰ 基本的な考え方」、これそのものは新しい常用漢字表そのもののでしょうか。

○林副主査

答申にはこの基本的な考え方はもちろん、これをどういうふうこれからまた整備するかは大事ですけれども、これは当然答申の中には入っています。ただ、これまでの例を見ますと、告示に関しては非常にシンプルでありまして、こういうところを省いて表の見方に相当する部分と、表が中心になるものというふうに考えております。

○納屋委員

そうしますと、現行の常用漢字表の形は大変シンプルなものということになるんですね。つまり、答申が内閣告示になったときには、試案の「Ⅰ 基本的な考え方」で言っている漢字表の説明の部分というのが余りないのではないかなと、そういう想定をしています。高木委員が言ってくさっているところは、試案の方で言いますと(14) ページにおいて、5の「その他関連事項」の(2)「学校教育における漢字指導」のところで、これだけ丁寧な常用漢字表の取扱いについて括弧書きがあって、この部分を踏まえればどういうことがなされるか、つまり、常用漢字表が新しくなったとしても、それを教育の世界の方でもう一度その取扱いについて、いろいろな配慮がなされるものと私は踏みます。したがって、今、高木委員がおっしゃってくださったことは、これまでの議論の中にも出てきたことが

あるということで、考えていいのではないかなと思って伺っているわけです。

そうすると、それで落ち着くのかなというふうに思うのですが、この部分が全部切られてしまって表のところだけだと分かりにくいところがあって、現行表の前書きのところ、これは「国語関係訓令・告示集」の19ページになりますけれども、これの前書きのところの5、ここには1項目、このように書いてあります。「この表の運用に当たっては、個々の事情に応じて適切な考慮を加える余地のあるものである」というふうな言葉がはっきりうたわれているわけですね。この中に、多分教育の方での諸問題というものも包含されながらこういうふうに書かれているのだと、私は読んでいるのですが、このような形の十分な配慮を付けていただくということを前提にしていく方がいいのではないかなと思っています。

ただ、先ほどの音訓表、それから字種の問題についても個別の問題になったときには、この字は減らした方がいいんじゃないかというような、全体の負担感のことからプラスの191字のところを減らす要素が学校教育の方からあるのかどうかということになりますけれども、大きな基準からしたらやはりそうではないのではないかなと思って、私なんかは聞いています。ですから個別の字種の問題になってきたら、またそれはそれでちょっと違っていいというふうに思いますから、教育しにくいところの「淫」という字なんかは、私の感じなんですけれども、教材に「淫」という字が出てくるというよりも、大変申し訳ないけれども、これは事実としてそういう事実がなくなることを私は当たり前のことですけれども願っているわけですから、都道府県の段階の条例に淫行条例というのがあるわけです。こういうふうな実体がなくなることをもう願っている。それからこちらだってそういうことを子供だけではなくて、社会に向けて発信しているわけなんですけれども、事実というのと言葉の問題はちょっと違うのではないかなと感じております。

○松村委員

いろんなことがあるのですけれども、一つは、6/7ページのところにある中学校の部分で言えば…もう何回か申し上げているのですが、卒業までに書くことについては本当に1006字の範囲で書くことがまず指導要領では求められている。で、そのほかの常用漢字の大体については読むことができるようにというのが、求められている線だというのは当然のことなのですが、もう分かっていることなんですけれども、それを中学校でどういうふうに常用漢字の大体を教えているかという、先ほどどなたかが質問なされた、今話に出ていた「淫（イン）」も含めてですが、こういう漢字が常用漢字表の中に入れば、どう教えるのだろうという問題はやっぱりあるわけですね。これが書けなくてもいいけれども、常用漢字の大体を読むという線からすると、読みの学習の中には常用漢字の大体ということで漢字が入ってくる。今でもいろんな教材の文章の中で出てくる漢字は、ほとんど子供たちの読み書きの力として定着^{ちてい}をしている。

ところが、例えば魯迅の「故郷」という文章の中でこういうふうに漢字を覚えさせていくということが普通の王道ではあるのですが、どうしても文章の中に熟語としては入り切れない漢字が今までの常用漢字表の中にもたくさんあった。そういうときに国語の教科書では、それだけを取り出して、難しい漢字の読みであるとか、常用漢字の中の大体の読みを教えるために、コラムのような形で、取り出し教材のような形で覚えなさいという熟語として出てくるわけです。だから「玉璽」の「璽」を覚えるにはもう「玉璽」という漢字がそこにあって、これは「璽」と読む。そういう形で教えているのが今の実態です。

ですから私は、字種を余り増やさない方というのは、やっぱり漢字の習得は読んで、書いて、文脈の中で理解して、子供たちの語彙として定着をしていくという手順があるのだから、ああいう形で…ああいうというのはそういう一つの取り出し教材のような形で、余り普段使われない漢字をずらっと並べて読みなさい、読めるようにしましょうというのは、特別で、例えば、法律用語としてこれも常用漢字に入っています「罷免」の「罷」について、これだけ覚えるというような、そういう形を、字数としては余り増やしたくない

という思いがあります。

そういう意味で先ほどの「淫（イン）」とか、ここで高木委員が書いてくださったような漢字についても多少やっぱり削除の方にということを今までも申し上げてまいりました。学校教育の中で覚える漢字がすべてではないけれども、規範としてはやっぱり学校できちんとした読み書きを習得させたい。その力を通して子供はもっともっと外へ飛び出していくし、あるいは外に出ている漢字を中に取り込んでいって学校で習った漢字以上のものを覚えるという、先ほど阿辻委員がおっしゃったことは本当にそのとおりだと思います。

何でそんな難しい漢字を知っているのところがびっくりして言うと、先生だけが知らないんだというような顔をされることはたくさんあるんですね。例えばスポーツの世界で、例えば漫画の世界でよく使われる漢字はどんな難しい漢字でも子供たちは分かっている。で、そんな漢字がよく書けるといふふうに褒められることで、またそれはその子供の意欲につながっていくというところはあるので、教科書だけが漢字を覚える手段であるとは私も全く思っておりません、おりませんが、漢字の基礎、基本を教えるのは学校教育であるという自負はやっぱり持っているので、ここでしっかりと漢字の面白さを教えた上で、将来的にそういう漢字の面白さによって意欲を高めていくような人間を育てていきたいという気持ちは持っています。そんなことをちょっと実態として申し上げておきたいと思います。

○前田主査

今伺っていて、ちょっと疑問になったこと思い出してきたのですが、実は私は小学校の国語の教科書の編集を随分長くしておりまして、最近まで代表だったのですが、会社がもう潰れてしまって、私なんかやるからかもしれないけれども…（笑い）。その時の経験を今のお話で思い出したのですけれども、学年別配当の漢字というものを教材に合わせてずっと考えていきます。そうすると字が余ってしまうというか、載らないものがあるんですね。それをどう入れるかというのが非常に苦勞で、小学校6年なら6年でどうしてもこれを入れなければいけないと、そうするとそれを入れた例題みたいなものを作って何とかつじつまを合わせるのですが、これは非常に疑問だなと前から思っていたのです。

そういうことについては逆の考え方はできないのでしょうか、小学校はもうそれでしょうがないかもしれない。しかし、ある程度高学年では先ほどお話を伺いますと、何字ということは、例えば300字漢字を新たに覚えるということは言っているけれども、どの字ということは指定していないという話がありました。それと同じような考え方はできないだろうか、余り使われない、使いにくいような字であれば無理に教えなくてもいいんじゃないかと、少なくともその字を例として出したような問題を付けて、何とかつじつまを合わせるというようなことはちょっと不自然な感じがするのですけれども、これは素朴な疑問です。

○松村委員

私もそう思うんですね、だから先ほど高木委員がおっしゃった「大体」という言葉はどのような意味なのかというのが本当に分からないところがあるのですが、教科書では少なくとも常用漢字の全部を扱うんですね。そうすると、その教材で今前田主査がおっしゃったように小学校であれ、中学校であれ、教材の中でどうしても取り込めない漢字が出てくる、それを別扱いで教えてく。今後、おっしゃったように大体なのだからこれは教えなくていいよと言ったときに、どういう不都合が起こるかということは、私もちょっと申し訳ないけれども分からないのです。

というのは、入試のことがあるのですが、余り不勉強できちっと見ていないのですが、入試の問題で例えば逋信省の「逋（テイ）」が使われていたり、難しい読めないような「玉璽（ぎょくじ）」の字が入試に出たりということはないんじゃないかと思うので、あの辺は大体を読めるようにすればいいという、その規定からすれば書かなくていいのだろうけれども、やっぱり憲法はきちんと読めるようにならなければというのは基本としてあるのだ

と思うんですね。常用漢字についてはやっぱり全部教材ですくい取れなかったものはそういう形で学習する教材として別枠で用意するということが今までもあるので、これで新常用漢字表になればそういう枠が増えるのかなというふうに何となく思っていたことが一つあります。

それから先ほど邑上委員が手書きのところで何とかもうちょっと書き込めないかといったところも、私も同じようなことは考えていて、というよりも、御意見の中に確か手書きのところはまるで100回も200回も学校で繰り返しの練習を強要しているような書き方だと、今後それがもっと蔓延するのではないかというような御意見があったと思うのですが、そういうふうに誤解を受けないように、やっぱり漢字の習得は文章を読んだり書いたり、話したり聞いたりといういろんな練習を繰り返し行う中で習得するというようなことを、もうちょっと丁寧に書けないかなということは思っておりました。

それからついでですけれども、多分小学校で学年別配当漢字はあって、中学校で学年別の配当漢字がないというのは、やっぱり小学校でさえそういうことで教材選びに苦労するとすれば、中学校の1年、2年、3年に分けたときに、そこに配当される漢字で、うまい教材が採れるかという問題が多いのかなというふうには思います。

○阿辻委員

何度も発言して申し訳ありません。4の(2)の「教育上、学習指導上指導が難しい漢字」のところで6文字挙げていらっしゃるんですけど、今日見せていただいた新聞記事もこと重なっているのですが、私は、この6文字はいずれも表外漢字ですから、学校で習った覚えはないはずですが、中学生、高校生のころ多分この6文字は全部知っていました。で、習った覚えはもちろんありません。私のみならず多分この場にいらっしゃる方々のほとんどの方が高校生ぐらいのときには上の4つの文字はお読みになれたのではないかと思います。

なぜ、読めたのか。それは、教科書以外の自分の読書経験や町の中の言語活動における接触の結果であつたに違いない。これが常用漢字に入ったら学校で百パーセント教えるということであれば、教えることに何の不都合があるのだと、私はなぜこれが教育上指導が難しいのか、例えば人生を賭けるとか、呪うなどというのはこのごろのゲーム世代の子供だったら呪文なんて言葉はしょっちゅう使っているわけですし、「艶(つや)」というのは一体なぜいけないのか、それから「鬱(うつ)」は何回も議論に出ています。「籠(かご)」というのは画数の問題であれば、これ22画ですから音楽鑑賞の「鑑(かん)」は22画か23画ぐらいですので、ほとんど画数は変わらない。「淫乱」の「淫(いん)」に関しては確かに特定のニュアンスを感じさせない語意を探すのは難しいかもしれませんが、それは、高校ぐらいで扱う教材であれば、例えば耽美主義、短歌の作品だったら出てくるでしょうし、教材の工夫の仕方ではないかなというふうには思います。学校でこの文字を教えるはいけないというのは、この文字は教育上悪い文字だというのは、私は言葉狩りにつながる非常に危険な行為というふうにも、極言すれば感じます。

○武元委員

教科書の実態をちょっとお話ししたいと思うのですが、まず、この「大体の」というのは業界では8割というふうに理解をされていて、いわゆる本文中で出していくのが中学校では大体8割ということをめどにしています。ただ、当然全部が出るわけではございませんので、それはもう仕方がないことなんですけれども、ただ一方で、巻末に漢字表というのは必ず掲載するんですね、これはもう全部いわゆる常用漢字をすべて載せなければいけないわけです。当然それがなかったとしたらこれは欠陥商品だと言われるに違いございませんので、間違いなく常用漢字は表としては載っているというのが実情でございます。そういうふうに決まれば、もう教科書はそのようにせざるを得ないわけでございます。いろいろ考えるわけでございます。

個人的な意見にもなりますけれども、今、阿辻委員がおっしゃったことと…ちょっと差し障りがありますけれども、私も同じように思っております。つまり、「淫ら（みだら）」という言葉を知ってはいけないわけではございませんで、「淫らな行為というのはすべきではない」という文脈で理解すればいいわけですし、そういうふうにしてある特定の漢字を避ける必要は私はないと思います。それが世間一般に使われる言葉であれば、それに対して漢字を当ててそれを学習するということは否定すべきことではないと思います。ただ、漢字数が増えますと、出版するのに苦勞するというのも教科書の間違いない実態でございます、そのことは私たちとしても困るわけです。

それからちょっと話が飛びますけれども、当然先ほど申し上げましたように巻末に常用漢字表というのが載るわけですね、そのときにやはり字体、字形の違いというものが出てくるということが出てまいります。つまり、いわゆる表外漢字のままで出すということも必要なのでしょうけれども、教育的なことを考えました場合には、例えばですけれども、山括弧に入れて、これまでの常用漢字と同じ形のものをしておくというような方法はあるのではないかと考えています。これは一方で今の常用漢字表の中にもいわゆる康熙字典字体というのが括弧の中に入れて示してありますけれども、それとは違う印を付けるというか、括弧でくくるというか、そういう形でそういった字については字形を示すということはあるのではないかと気がいたします。

○杉戸委員

意見というよりも、またお尋ねになってしましますが、資料の3/7ページの表の下にあります「学年別漢字配当表」の初出は、昭和33年度学習指導要領」と、これは関係があるのかなのか伺いたいのですが、当用漢字が出たのが21年だと思いますが、そこから11年ぐらいたっています。それからこの表の下にある「平成元年3月15日告示」これが常用漢字を56年から数えると8年目、11年とか8年というその時間差はどういう意味があるのか、あるいはこの数字には特に意味がないのかということをお伺いしたい。

私はかすかに記憶している881という数字があって、それは私は昭和24年生まれなのですが、1006の前にあった教育漢字の数ではないかと思うのですが、そういう時代から変遷を経てくる中で当用漢字が確定し、常用漢字が公布されるというそういう国語施策の方と教育の方の漢字の学年別漢字配当のその動き、一つは11年とか8年という時間のずれはどういう意味があるのか、それからその関連をきちんと踏まえた議論が今のような今日の議論に必要なのではないのかということをおもう。つまり端的に言えば今度新常用漢字表が、もしこの先確定した段階では、それを踏まえた教育の世界での議論が11年なり8年なり掛けてでもされてしかるべきではないかという、そういうふうにご数字を21年から33年、56年から平成元年という、そういうように数字を読んでいいのか、それは全然違うのかということをお伺いしたい。

○前田主査

高木委員、今のに何かお答えがありますか。

○高木委員

氏原主任国語調査官の方からお答えいただいた方がいいかと思いますが…。

○氏原主任国語調査官

事実関係で申し上げますと、今おっしゃったような意味で8年とか11年掛けてでもという意味は余りないのかなと思っております。昭和21年に当用漢字表が出ますが、その2年後の昭和23年に当用漢字音訓表と当用漢字別表が出ています。当用漢字別表には義務教育期間に習得すべき漢字が示されていて、これが881字です。ですから、杉戸委員が881字という記憶があるというのは当用漢字別表の数です。この当用漢字別表というのは義務教育期間

に習得する、その字種だけが決まっていたんですね。当然881字をどういう順序で出すのかとか、あるいはどの学年にどういう漢字を配当していくのかということは教科書によって違っていたわけですね。そうすると、具体的な問題として、例えばA小学校で学んでいた少年がB小学校に転校して教科書が変わってしまうと、A小学校で使っていた教科書ではまだ習っていない漢字がB小学校に移ったときには習っていることになっていたりとか、その逆のことが起こるとかという問題が起こってきます。それで学年ごとの配当表というものが必要であろうという議論になっていくのです。それが、昭和33年の学習指導要領で初めて示されたのですが、ついでに言うと、この昭和33年の時、それから次は昭和43年ですけれども、この時の学年別漢字配当表は、今日の高木委員の資料ではいわゆる教科書体という手書き書体で示されているわけですが、昭和33年と43年のものは明朝体で示されています。それが昭和52年の時に、いわゆる教科書体というものが使われて示されるようになったということです。ですから、杉戸委員が最初におっしゃった8年とか11年とかは、たまたまそういう時間の関係になったということだけだろうと思います。

○杉戸委員

年表と数字についてはよく分かりました。ただ、その間にこの国語施策としての当用漢字なり常用漢字と、教育の世界での漢字の扱い方についての動きが絶えず連動して関連付けて動いていたということは確かなんですか。

○氏原主任国語調査官

はい。

○杉戸委員

そのことを言いたかったのです。11年とか8年という年数のことはよく分かりましたが、つまり繰り返しますけれども新常用漢字表についても教育の現場、あるいは教育の施策の上で改めてこの昭和33年とか平成元年、あるいはその間にあった何回かの見直し、字体の見直しも含めてそれと同じような目を持った検討が必要だというそういう前提で、これは私の個人の意見かもしれませんが。

今期、前期を含めて新常用漢字表の案を考えるというときの前提として新常用漢字表が定まった暁には教育のあるいはマスコミの世界も含めてですが、それぞれの個別の世界での議論が動くであろうと、それを前提にした常用漢字表の審議をここではすべきだという、これは、今日、阿辻委員が繰り返しおっしゃっている趣旨と同じだと思いますけれども、そういうことを改めて思います。高木委員の今日のお話は、そういうことも改めて確信を持って考え直すべき課題だというふうに私なりに受け止めました。

○氏原主任国語調査官

今おっしゃった意味であればそのとおりだと思います。必ず国語施策を学校教育でどう扱っていくかという、そういう順番になります。ですから、その意味では、おっしゃったとおりで、今日こういう形で時間を取っていただいたのも、その意味で、ここで国語施策として新しい漢字表が決まれば、それは学校教育の方と連動していきますので、連動していくときに、その連動のさせ方、あるいは連動の仕方として、この場では学校教育のことそのものを扱うことはできないのですが、できるだけいい形で、あるいはスムーズな形をつなげていくためにはどういうことが求められるのかということ、できればここで知恵を出し合いたいということで、時間を取っていただいていますので、その意味では、正におっしゃったとおりだと思います。

○やすみ委員

今日もいろいろとお話を伺いまして、幾つか思ったことを申し上げます。前半は、一つ

一つの文字のお話なども出て、例えば「鬱（うつ）」とか、石偏の「碍（がい）」とか、「三鷹」の「鷹（たか）」についてもいろいろとお話が出て、なかなかすぐに○とか×で答えを出せるものではないんだなという印象を受けました。ただ、それぞれ団体や個人から意見が来ていて、その一つ一つに答えていくことは大変かもしれませんし、また、これまで時間を掛けて作り上げてきたこの仮の漢字表がありますので、これを尊重して進めていくことが前向きに進んでいくことなのではないかなと思います。

前向きにスムーズにできるだけ進んでいくようにするには、やはり基本的な性格という部分に意見を寄せてくれた人たちが誤解をしていたり、書いてあるのにそれが理解できていなかったりするということがメッセージとして込められていると思うので、基本的な性格というところにもっと幅広くいろんな視点を記入するということが、それも大事なことなのではないかなと思いました。

また、後半は学校教育についての漢字表の在り方でしたけれども、私も子供の時にどんなふうに漢字を学んでいたのだろう、身近にあったらどうかと考えましたけれども、随分遠い時間になってしまいましたのでなかなか思い出せないのですが、でもやっぱり教科書だけではなくて、自分の好きな漫画だったり雑誌だったり、テレビだったりそういういろんなところから学校では習っていない漢字なども目にして、自分で使えそうな字は使っていたような気がいたします。ですから、漢字表が学校教育のある一つの土台にはなるのでしようけれども、教育の現場で大人が四角四面に、漢字を使うことの楽しさの枠を決めてしまわないでいけるように、それもまた漢字表の基本的な性格に書くということも大切なのかなという印象を受けました。

○東倉委員

今まで常用漢字の議論に携わってきて、今日は学校現場のお話を伺って、率直な意見を申し上げますと、私はこの常用漢字の議論がコミュニケーションの手段としての漢字使用ということが基本にあるわけで、それに比べて学校の現場というのはこういった常用漢字のコミュニケーションの手段としての在り方というものに、乖離しているのではないかなというふうな印象を受けました。それはなぜかという、教科書体という標準系があって、それに従って止めるとかはねるとかというのを余りにも厳しく教えている。しかしながら学習の理論、それからどういった学習によって効果が上がるかということを考えてみると、できるだけ多くの漢字をいろんなパターンで触れた方がそれはいいというのは学習理論上分かっている話です。したがって、そういう止めたり、はねたりではなくて、極端なことを言えば類似の字と間違えなければいいという視点で漢字を教えればいいのかと、それは、今後の情報社会において、その情報機器が仮名漢字変換によって漢字を表示してくれるわけですし、そういう中で正しい字を選ぶということにもそれは通じているのではないかなと思うんです。

今までなぜこういうふうに標準字体に基づいて漢字を教えられたかということを私なりに考えてみると、要するに手書きというものを余りに強調し過ぎたなということで、手書きというのは文字を覚える上での一方向にしか過ぎないというふうに私は思っていて、外国人が学習するようにパターンとして文字を見えるということで学習することと、手書きを比較してどちらがいいかということは、まだ余り確証はないのではないかなというふうに思っています。今後、我々日本人も外国人が文字を学習するような形で、情報機器を使うことによって、自然に近づいているのではないかなということです。しかしながら、手書きは一部で重要だということは私も理解していて、どういうふうに手書きを残していくかというようなことについては、我々が選択していかなければならないと思っています。

○武元委員

いろんな御意見を伺いまして、皆さんのおっしゃることは、そのとおりだと思うのですが、やはり改めて漢字を、どなたかの言葉を使えばシステムティックに教えるのも

やはり学校教育の中であるということとは否定できないというふうに思います。それであればやはり新しい常用漢字表が世間一般に普及していくということを考えましたときには、前にも申し上げたことではありますけれども、やはり教育との関係というのを十分考えなければいけないのではないかという気がいたします。そうしますと、これも以前申し上げたことですが、教科書業界の都合を申し上げるわけではないのですけれども、特に中学校につきましては来年の4月に教科書を提出いたしまして、その秋に検定意見通知が行われるというスケジュールになっているわけです。その時に新しい常用漢字表が例えば先ほど申し上げました一覧表に載る、載らないという問題がまた起こってまいりますので、そのことの、つまり教育との関係ということやはり十分考えた方が良くはないかというふうに思います。

それから余計なことですがけれども、先ほど杉戸委員が881という数字をおっしゃいましたけれども、これはかなり昔のことになるのですけれども、この881以外に確か小学校の6年生ではそれ以外に百何十字かは学習するようになっていましたので、確か数の上では996字の時代とほとんど変わっていなかったと…。

○氏原主任国語調査官

途中、備考漢字115字が示されていた時期がありますね。それで996字になるわけです。

○前田主査

今日は1時間広げまして、3時間の長時間、御協力いただきましてありがとうございました。

本日は、これで閉会といたします。